R6（2024）年 共通テスト本試『草縁集』現代語訳

次の文章は、「車中雪」という題で創作された作品の一節である（『草縁集』所収）、主人公が従者とともに桂（京都市西京区の地名）にある別邸（本文では「院」）に向かう場面から始まる。

桂の院つくりそへ給（たま）ふものから、ア あからさまにも
桂にある別邸を造り加えなさるけれども、　（主人公は）少しの間も

渡り給はざりしを、友待つ雪にもよほされて
行きなさらなかったのに、　後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪に誘われて、

なむ、ゆくりなく思し立（おぼ）たすめる。かうやうの
突然　思い立ちなさったようだ。　このような

御歩（ある）きには、源少将、藤式部をはじめて、今の世の
外出には、　源少将、　藤式部をはじめとして、　今の時代の

有職（いうそく）と聞こゆる若人のかぎり、必ずしも召し
風流があると世に知られる若者の全てを、　必ずお呼び寄せになって

まつはしたりしを、イとみのことなりければ、かくと
側にいさせていたのに、　にわかに思いついたことだったので、こうだ（＝外出する）と

だにもほのめかし給はず、「ただ親しき家司（けいし）四人
それとなく知らせることさえもなさらず、　「ただ親しい邸の職員を4、5人

五人して」とぞ思しおきて給ふ。
連れて」　と決めなさる。

やがて御車引き出（い）でたるに、「空より花の」と、
すぐに牛車を出しているときに、　「空から花が（散るように雪が降る。雲の上は春かな）」と

aうち興じたりしも、めでゆくまにまにいつしかと
面白がるが、　（雪を）賞美しているあいだに、「早くも（消えた）」と

散りうせぬるは、かくてやみぬとにやあらむ。
散り終わったのは、　このように（今日の雪が）終わったということであるのだろうか。

「さるはいみじき出で消えにこそ」と、人々死に
「それにしても、並々でなく（急に雪が）降りやんだぞ」と　人々がとても強く

返り妬(ねた)がる、「げにあへなく口惜し」と思せど、
悔しがるのを、「本当にあっけなくて残念」とお思いになるけれども、
「さてb引き返さむも人目悪(わろ)かめり。なほ法輪の
「そうはいうものの、（出発してすぐに）引き返すとしたら、それも世間体が悪いようだ。やはり法輪寺の
八講にことよせて」と思しなりて、ひたやりに急がせ給ふほど、またもつつ闇に曇りみちて、ありし
八講の法会を理由にして（行こう）」とお思いになって、ひたすら急がせ
なさるうちに、またもまっくら闇に雲が満ちて、以前
よりけに散り乱れたれば、道のほとりに御車たてさせつつ見給ふに、何がしの山、くれがしの河原
よりも いっそう（雪が）散り乱れたので、道の端に牛車を止めさせて ご覧になると、どこどこの山、それぞれの河原も、
も、ただ時の間にc面(おも)変はりせり。
景色が変わった。ほんのちょっとの間に
かのしぶしぶなりし人々も、いといたう笑み曲げて、「これや小倉の峰ならまし」「それこそ梅津の
あの渋々（ながらの参加）だった人々も、大変甚だしくにこにこ笑って、「これが小倉山だろうか」「あれこそが梅津の
渡りならめ」と、口々に定めあへるものから、松と竹とのけぢめをだに、とりはづしては違(たが)へぬべか
渡し場なのだろう」と、口々に議論し合うけれども、（雪でわかりづらく）松と竹との区別でさえ、失敗して間違えてしまいそうだ。
めり。「あはれ、世に面白しとはかかるをや言ふならむかし。なほここにてを見栄(は)やさま」とて、
「ああ、世の中の風情（ある景色）とは、このようなのを言うようだよ。やはり ここで見て賞美しよう」と言って、
やがて下簾(したすだれ) かかげ給ひつつ、
そのまま牛車のとばりを上げなさったままで、

ここもまた月の中なる里ならし
ここもまた、月の中にある（桂の）里であるらしい。

雪の光もよに似ざりけり
雪の光も決して（この世のものとは）似ていない（と思われるほど神秘的に光り輝いている）なあ。

などd興ぜさせ給ふほど、ウかたちをかしげなる
などと（詠んで）面白がりなさるうちに、　見た目が好ましい、

童（わらは）の水干（すいかん）着たるが、手を吹く吹く御あと尋（と）め来て、
童で　水干を着た童が、　手を（温めようと）何度も吹きつつ（主人公の）後を尋ね求めて来て、

榻（しぢ）のもとにうずくまりつつ、「これ御車に」とて
牛車の台の辺りにうずくまって、　「これを御車（の方）に」と言って

差し出でたるは、源少将よりの御消息なりけり。
差し出したのは、　源少将からの　お手紙だった。

e大夫（たいふ）とりつたへて奉るを見給ふに、「いつも
邸の職員が受け取ってお渡しした手紙を（主人公が）ご覧になると、（手紙には）「いつも（私をお供に

後（おく）らかし給はぬ、かく、
選ぶのに）後回しになさらないのに、このように（置き去りにされたので）、

X　白雪のふり捨てられしあたりには
白雪が降る（ように私を外出の供にせずに）振り捨てなさったあなたに対して、

恨みのみこそ千重に積もれれ」
（雪ではなく）恨みが幾重にも積もっている。

とあるを、ほほ笑み給ひて、畳紙（たたうがみ）に、
とあるのを（読んで）微笑みなさって、　懐紙に、

Y　尋め来やとゆきにしあとをつけつつも
（私を）尋ね求めて来るか（思って）と、雪に車の跡をつけながらゆき進みながら

待つとは人の知らずやありけむ
待っていたとは、あなたはわからなかったのかなあ。

やがてそこなる松を雪ながら折らせ給ひて、その枝
すぐに　そこにある松を　雪がついたまま折らせなさって、　その（松の）枝に

に結びつけてぞたまはせたる。
（「待つ」を含む返歌を）結び付けてお与えになった。

やうやう暮れかかるほど、さばかり天霧（あまぎ）らひたりしも、いつしかなごりなく晴れわたりて、名に負ふ里の月影はなやかに差し出でたるに、雪の光もいとどしく映えまさりつつ、天地（あめつち）のかぎり、白銀（しろがね）うちのべたらむがごとくきらめきわたりて、あやにまばゆき夜のさまなり。

だんだんと　日が暮れてきた頃、　あれほど空が一面に曇っていたのに、
いつのまにか、　雲一つ無く　晴れ渡って、（月を想起させる名を持つ桂の）
里は　月光が　鮮やかに差し込んでいるなか、　雪の（反射による）光も
ますます　映えて（鮮やかさが）まさって、　天地の果てまで、　白銀（の雪）が
続いているように　一面が輝いて、　たとえようもない
ほど眩しい夜の景色である。

院の預かりも出で来て、「かう渡らせ給ふとも知らざりつれば、とくも迎へ奉らざりしこと」など言ひつつ、頭（かしら）ももたげで、よろづに追従するあまりに、牛の額の雪かきはらふとては、軛（くびき）に触れて烏帽子（えぼし）を落とし、御車やるべき道清むとては、あたら雪をも踏みしだきつつ、足手の色を海老（えび）になして、桂風（かつらかぜ）を引き歩く。

桂の院の管理を任された人も出て来て、　「このように（主人公が）お越しになるとも
知らなかったので、　すぐにお迎え申し上げなかったこと（お許しください）」　などと
言って、　頭も上げないで、　何事につけても　こびへつらい過ぎて、
牛の額の雪を払おうとして、　牛車の横木に触れて
（落としたら大恥となる）烏帽子を落とし、牛車が進む予定の道を綺麗にしようとしては、
もったいないことに（綺麗な）雪を（軽率に）踏みつぶして、　手足の色を海老のように赤くして、
桂の木の間を吹き抜ける風に（身体を冷やし）、風邪を引きながら歩く。

人々、「いまはとく引き入れてむ。かしこのさまも
人々は、「今は早く中に入れてしまおう。あちらの様子も
いとゆかしきを」とて、もうそそきにそそきあへる
とても見てみたいよ」と言って、一斉にそわそわとそそっかしくしているのを、
を、「げにも」とは思すものから、ここもなほ
（主人公は）「たしかに」とお思いになるけれども、ここもやはり（風流な景色で）
見過ぐしがうて。
見過ごしにくくて。

オンライン 東大合格 敬天塾